

### 第3章 ミャンマーにおける「パラウン仏教」の創出とその実態について

小島敬裕

#### 一 ミャンマーの民族と上座仏教

##### 山地の少数民族パラウン

テーマがミャンマーの少数民族の仏教ということで、かなり細かい話になりますが、どうぞご容赦ください。

私自身は、中国とミャンマーの国境地域のタイ族という少数民族の仏教について研究してまいりました。今回は、ミャンマーの民族の実践について紹介するようになるという依頼がありましたので、ここ数年、調査してきましたパラウン族の仏教実践についてご報告させていただきます。<sup>1</sup>

はじめに、「パラウン」と呼ばれる山地民と、主な調査地ナムサンについてご紹介します。これ（図1）は私が撮ったナムサンの写真です。彼らは山の尾根沿いに住んでいます。その付近に茶畑があります。茶を栽培して生業としている民族です。

本発表では、主にパラウン族について取り上げますが、パラウンのみならず、シャン族、あるいは



図1 ナムサンのパラウン族村落

はビルマ族という少数民族との関係から分析するため、まずその三民族について、簡単に紹介させていただきます。

ミャンマーでは、一九八三年の国勢調査に基づいて、百三十五の民族(၀၂: *taingyintha lunyo*)<sup>2</sup>が存在するといわれております。本発表で取りあげる、パラウン、シヤン、ビルマの三つの民族もそこに含まれています。

パラウンとは、ビルマ族による他称です。自称は「タアーン」という山地民です。パウランが多く住むナムサンという町の中心部は標高約千六百メートルに位置しています(図2)。

その次に、パラウンとの関係を取り上げるのは、「シヤン」という人たちです。「シヤン」というのはビルマ族による他称



図2 シャン州ナムサン

で、自称は「タイ」です。彼らは主に山間部の高原地帯の盆地に住んでいます。ナムサンに近いチャウマーという町の標高は七百〜八百メートルです。

そして、最大民族のビルマ族は自称「バマー」といいます。主にミャンマー中央部の平地地帯に居住しています。

東南アジアにおける山地民と平地民の関係を扱った研究として、エドモンド・リーチ (Edmund Leach) の論文<sup>3</sup>が挙げられます。リーチは、平地と山地の社会組織について二項対立的に以下のような特徴を挙げております。

まず、平地民は階層制の政治構造を持ち、生産性の高い水稲耕作をおこなない、非単系出自であり、仏教を信仰します。そして、複数の言語が使用されることはあまりないといえます。

これに対して、山地民は平等主義の統治を行い、生産性の低い焼畑耕作を営み、単系出自であり、精霊信仰が中心です。また、複数の言語が使用されているといえます。

しかし、リーチの貢献は、このような特

徴を持ちながらも山地民が生活スタイルを変え、仏教徒になることによって、「文明」化された平地民になる場合もあることを指摘した点です。つまり民族は本質的でなく、可変的であることを明らかにしたという事で知られています。

しかしパラウンは山地民でありながらも仏教徒で、ソーボワ(B: sawbwa, P: pāmang)を首長とする階層制の政治構造を持っています。そこで、リーチは山地、平地の類型の「例外」としてパラウンを扱っています。そして、パラウンは山地民のなかでも茶を栽培しているため、経済力があり、仏教を受容して、シャンの政治的モデルを模倣したのだと説明しています。

### パラウンと上座仏教

ここで、パラウンの信仰する上座仏教の実践と言語の関係について、簡単に触れておきます。

東南アジア大陸部を中心とする上座仏教徒社会の各地では、比較的均質なパーリ語経典が継承されています。先ほど、藤本先生のお話にありましたように、大乘仏教のように宗派によって重視する経典が異なるという状況とは違います。ただ、上座仏教にも、細かな儀軌作法、あるいは戒律に関する実践の相違に基づくグループのようなものはあります。それを、この発表では「教派」と呼んで区別をします。

上座仏教の経典に用いるパーリ語は、文字を持っておりません。各地で使用されるインド系の文字によって筆記されています。先ほども少しお話がありました、パーリ語の発音は、民族

によって若干の相違があります。例えば、儀礼の際に唱えられる「三帰依文」の冒頭部分は、ビルマ式では、「ボウダン・ダラナン・ゲツサーミ」と唱えられます。これに対して、シャン州東部を中心とするタイ系民族の様式では「ブツタン・サラナン・ガッチャーミ」と唱えられるのです。このように微妙な発音の違いがあります。

また、三蔵經典のみならず、パーリ語經典の一節に続き、民族語で内容に関する説明が続く書物が作成されていきます。本発表では、それを「仏典」と呼んで、經典と区別することにいたします。

では、パラウンの場合は、仏教実践においてどの言語が用いられているのでしょうか。パラウンについては、ミルン (Leslie Milne) という人によるイギリス植民地時代の調査記録が知られています。そのなかに、布薩日(満月・新月、上弦八日・下弦八日のこと)の午後、パラウンの寺院境内の宿坊では、在家の識字者がシャン語またはビルマ語でジャータカを朗誦する。また、パラウンは、独自の文字を持たなかったため、王統記もシャン文字で書かれている、という記述があります。<sup>4</sup>

この三言語は、言語系統からしても、パラウン語はモン・クメール系言語、シャン語はタイ系言語、ビルマ語はチベット・ビルマ系言語というように、かなり異なっています。それにもかかわらず、パラウンは異民族の言語を仏教実践に用いたという記述がイギリス植民地時代にはあるわけです。

では、なぜパラウン語を使わなかったのでしょうか。後ほど説明するパラウン知識人のウー・ポーサン (U Paw San) の、植民地時代から一九四八年の独立直後にかけての状況に関する記述によれば、仏教儀礼の際に、パラウン語で礼拝すると軽蔑されたと言います。なぜならパラウン語は「低級の言語」と認識されており、シャン語で礼拝したほうがより効果的で、聴き心地もよいとパラウン族は感じていたからだとウー・ポーサンは説明します。そして、パラウン族がこのような意識を持つように至ったのは、ソーボワ (首長) や僧侶たちが自民族の利益を考えず、シャン文化を「高級」と見なす一方で、自らの文化を「低級」と見なしていたからだと分析します。<sup>5</sup> この分析の真偽はともかく、異民族の言語で経文が唱えられていたことはフィールド調査からも確かめられます。

ところが、二〇〇九年から二〇一一年にかけて、ミャンマー・中国国境で調査を行った際に、在家の儀礼専門家がパラウン文字で仏典を書き、パラウン語で朗唱していることに気づきます。驚いて聞き取りをおこなうと、パラウン文字やパラウン仏典の発祥地は、シャン州のナムサンだと説明されたのです。その話を聞きまして、私は関心を持ち、ナムサン周辺の調査を始めることにしました。

ナムサンを訪れると、仏教儀礼のなかでも雨安居期間中の布薩日・葬式・新築式・布施儀礼で行われる説法の言語調査を行いました。その結果、ナムサン中央部では、僧侶がパラウン語で在家に説法し、周辺部の村落寺院では、在家の専門家ター・ジャレー (P: ia càrè) が、パラウン語の韻

文形式で書かれた仏典を朗唱しているということが分かりました。そして、パラウンのエリート僧たちも、これを「パラウン派」の仏教と認めて推進しようとしている状況にあることが分かりました。

### 本発表の目的と方法

そこで、本発表では、以下の三つの問題について解明することを目指します。まず一つは、どのようなプロセスで「パラウン派」の実践が構築されたのか。次に、山地における「パラウン派」の実践は、リーチの言うように平地の仏教の模倣に過ぎないのか。三つ目に、「パラウン派」仏教のシャン州各地における実態はどうなっているのか。これらの問題について、ミャンマーにおける現代の社会変容との関わりから考察していきたいと思えます。

パラウンの上座仏教について扱った先行研究としては、先ほどご紹介したミルンが、イギリス植民地時代の一九一〇年代に調査をおこなった貴重な記録があります。独立後の一九五〇年代に行った調査に基づく記録としては、考古局の役人のミンナイン(B. Min Nain)が、一九六二年に少数民族文化シリーズの一冊として出版した記録があります。<sup>7</sup>

しかし、その後、ミャンマーでは長くパラウンの仏教に関する書籍は出版されませんでした。最近になって、パラウンの知識人やパラウン僧らが、自身で書籍や修士論文を執筆し始めております。本発表でも、これらの成果を取り入れていきます。

それと並行して、二〇一一年以降、フィールド調査も続けてきました。調査地は、本発表で主に扱うシャン州のナムサンを中心に、チャウマー、チャイントン、ターチャーレイ、カロー、ヤンゴン、マンダレーで、パラウンの出家者・在家者に対する調査を行いました。

## 二 ナムサンの上座仏教の特徴

パラウンの上座仏教の受容過程については諸説があり、確かなことは分かりませんが、パラウンは茶の栽培と販売によって生計を立てていたことが要因の一つとして考えられます。パラウンは、その茶の販売によって得られた利益で、盆地に住むシャンから米や塩などの生活必需品を購入していました。<sup>10</sup> このような日常的な接触があったため、それが仏教の受容につながったのではないかと考えられます。

では、いつ仏教が伝来したのでしょうか。その時期についてもはっきりしたことは分かりませんが、取り上げられることが多いのは、一七八二年にビルマのボードーパヤーという王が布教僧を派遣し、パラウんに仏教を広めたという伝説です。これに対して、ミルンは、一六〇一七世紀にシャンのクニであるテインニー(S: Sen Wi)北部やモーメイ(S: Mang Mit)では仏教が受容されていたため、その頃からナムサン周辺のパラウンにも、仏教に関する知識は普及していたと



推測しております。

一方、ナムサンで聞き取りを行いますと、バラウンの知識人や僧侶たちは以下のように説明します。

まず、現在のシャン州東部からテインニー経由で、タイ国北部やシャン州東部のタイ系民族を中心とするヨン派がナムサンに入ります。その後、一八七八年にナムサンの町に管長寺院(ဝဏ္ဏဂေါ့ကျောက်ကျောင်း)が完成します。すると今度は、ミャンマー中央部のマンガレーという町で教理学習をしていたバラウン僧のトゥナンタ師をナムサンの首長がマンガレーから招請し、それ以来、バラウン族の間ではビルマ派(P: Pai Mam)とも呼ばれるトゥダンマ派が流入したと言います。

では、この二つの教派の実践にはどのような違いがあるのでしょうか。トゥダンマ派は、ナムサンの町の中心部に近い村落の寺院が中心になっています。礼拝の際のパーリ語の発音はビルマ式です。これに対して、ヨン派はナムサン周辺部の村落寺院に分布しています。一九八〇年の全教派合同サンガ大会議以降、制度的にはトゥダンマ派に編入されていますが、彼ら自身はヨン派としての意識を持っています。礼拝の際のパーリ語の発音が北タイ式に近いのが特徴です。

また一九六〇年代から七〇年代以前は、仏典に使用された文字も異なっていました。トゥダンマ派では、ビルマ文字とシャン文字(ビルマ文字を借用したタイ系民族の文字)で書かれ

た仏典を使用していました。先ほど紹介したミルンが調査したのは、カトゥール (P: Katur, S: Samlon) というサブ・グループで、これはトゥタンマ派の寺院です。

これに対して、ヨン派の寺院ではヨン文字が使われていました。これは北タイと共通するタイ系民族の文字で、タム文字とも呼ばれます。あるいは、シャン文字で書かれた仏典を使用するというように、使われる文字が異なっていたわけです。

### 三 パラウン文字の誕生

#### 文字創出の背景

しかし現在では、これらの仏典の他にパラウン文字で記された仏典も使用されていることを先ほどお話ししました。では、このパラウン文字は、どのように誕生したのでしょうか。その経緯についてお話をしたいと思います。

最初に、パラウン文字の創出が試みられたのは、イギリス植民地時代のことです。一九一二年には、アメリカの女性、マクレーン (Maclean) という人が、ローマ字を用いたパラウン文字を考案したとの記録が残っています。しかし読み書きが難しく、発音表記も不完全なため、成功しなかったといえます。このマクレーンの素性についてははっきりしていませんが、パラウン文字

統一に関わった知識人への聞き取りによれば、マクレーンは宣教師だったといえます。

当時のミャンマーでは、キリスト教の布教とともに、それまで文字を持たなかった少数民族の文字が宣教師によって考案されることはよくありました。パラウン文字創出の試みも、さほど珍しい事例とはいえません。ただ、熱心な仏教徒の多いパラウンは、改宗者を現在に至るまで出しておらず、パラウン文字は普及しなかったのだらうと考えられます。

その後、文字創出の試みは沈静化しますが、ミャンマー独立後の一九五〇年代に、パラウン文字作成の動きが再活発化します。その際に重要な役割を果たしたのが、ウー・ポーサン（一九〇九〜二〇〇五）という人です。彼は、一九五五年にビルマ文字を借用したパラウン文字を完成させます。当時、パラウンのソーボワ（首長）だったクンパンチン（P: Khum Pan Chin）は、この業績によって彼に金メダルを授与しています。以下、ウー・ポーサン自伝によって、文字創出の経緯を述べています。

その契機は、クンパンチンが、当時のウー・ヌ首相の紹介で、二〇世紀のミャンマーにおける代表的なビルマ族詩人・作家・反英独立運動指導者のタキン・コードーフマイン（B: Thakin Ko Daw Hmaing）に会ったことでした。当時、クンパンチンは有力な首長の一人で、一九四七年のピンロン（S: Pan Lon）会議でシャン州の代表を務めた他、国会議員を務めていました。パラウンには文字があるかとコードーフマインに尋ねられたため、「ない」と答えたところ、「文字を持たない民族は滅びる」と言われたのです。

この発言を聞き、クンパンチンは恥ずかしく思い、パラウン文字の創出を指示します。これに對して、ウー・ポーサンが基本字母にビルマ文字を借用した上で、「*si*」の一文字を加え、母音記号や末子音を示す記号は、ビルマ文字と共にシャン文字から借用したパラウン文字を作成しました。ウー・ポーサン自身、出家者としてマンダレー、ヤンゴンでビルマ語を学び、さらに、当時としては非常に珍しいのですが、スリランカで英語を学んでいます。その後、還俗したため、自分が文字を持たない「低級な」「未開の」民族の出身であることを恥ずかしく感じていたと言うのです。

### パラウン文字の「統一」

しかし、ナムサン以外のシャン州各地には、さまざまなパラウン文字が存在しました。そこで、シャン州指導部は各地の文字考案者を呼び、統一パラウン文字制定のためのタウンジー会議を一九六七年から六八年にかけて開催します。そこで主にビルマ文字を借用したウー・ポーサンの表記法が基本的に承認されていきます。

ビルマ文字派がシャン文字派に勝利した理由には、以下の三点が挙げられています。一番目には、パラウンの大部分は仏教徒であり、仏典のパーリ語を伝統的なスタイルで表記できることです。例えば、シャン文字の仏典でも、パーリ語の部分だけはビルマ式に書くのです。そのようなこともあり、ビルマ式を使ったほうが仏教徒にとってはいいのではないかと考えられたので

す。二番目に、ビルマ文字の基本文字数が三三文字で、シャン文字の一九文字よりも多くの音節を表記できることです。三番目に、ビルマ文字のタイプライターと兼用することができるという意見があったためです。

それにもかかわらず、会議後も各地の文字考案者は、自らが発明した文字をそのまま使用し続けました。このように多様な文字が併存する状況に対して、当時、マンダレー大学、タウンジー大学に在学していた六名のパラウン学生が、タアーン（パラウン）文学および文化中央委員会を組織し、一九七二年に各地のパラウン代表を招集します。

その当事者へのインタビューによれば、学生たちには以下のような問題意識があったといえます。一番目に、文字の相違は民族の分裂につながる恐れがあること。二番目に、シャン、モン、カチンなど他の少数民族は文字を持っているにもかかわらず、パラウンには文字がないことが恥ずかしかったこと。三番目に、文字がなければ民族も消滅してしまうという危機意識があったといえます。

学生たちは、会議で各種のパラウン文字を「統一」していきます。その文字では、基本字母にビルマ文字を借用したウー・ポーサンの方式が踏襲されています。しかし、ウー・ポーサンの表記法がそのまま採用されたわけではなく、母音や末子音を表す記号には他の表記法も採用するなど、主要方式を折衷したものになっています。その理由について、文字の考案に関わったM氏（男性、六二歳）に尋ねますと、「どれか一つの方法に偏ると別のグループの反発を招く恐れ

があるため、なるべく偏らないように各文字の方式から一部ずつ採用した」と言います。この一九七二年版パラウン文字は、現在に至るまでナムサンやマンダレー、ムーサー、ナンカンなどの地域で教育されております。

#### 四 パラウン仏典の創出

##### パラウン仏典創出の経緯とその独自性

では次に、このパラウン文字による仏典が創出された経緯について見ていきたいと思えます。

現在、使用されている仏典の大部分は、ナーガテーナ(Nagathena 一九二二—一九九一)師という僧侶が、一九六一年から創作を開始し、特に一九七〇年代後半に、ナムサン周辺地域で普及したもの(図3)です。ナーガテーナ師は、マンダレーの教学寺院で教理学習した後、ナムサンの管長寺院に戻り、長らく副住職を務めていました。一九八〇年に、ヤンゴンで開催された全教派合同サンガ大会議には、ナムサン郡の代表として参加しております。

パラウン語の仏典を創作した経緯について、ナーガテーナ師の弟子で、現在、管長寺院の副住職を務めるK師は以下のように説明します。

一九六〇年代当時は、シャン語がナムサンにおけるリンガ・フランカ(共通語)だったため、僧

侶やター・ジャレーがシャン文字で書かれた仏典で説法しても、パラウン在家は、ある程度、その意味を理解することができた。しかし、シャン語話者でも、韻文形式の仏典を聴いて理解できる人は減少していたため、在家信徒が説法に関心を持つように、僧侶の側でも工夫が必要だったと言うのです。

その後、一九六二年から一九八八年にかけてのネーウイン政権時代に、学校においてビルマ語の教育のみが認められるようになります。また、一九七〇年代まではシャン族がナムサンへ来て茶摘みをしていたのですが、一九八〇年代以降は、盆地の米生産量が上がり、茶摘みに来なくなり、そして、シャン族に代わって、平地のビルマ族がナムサンへ茶摘みに来るようになります。そのため、シャン語話者は徐々に減少し、ビルマ語話者が増えていきます。このような要因が重なり、リング・フランカもシャン語からビルマ語に変化していったという状況があるわけです。

こうした状況において、ナーガテーナ師はシャンの言語・文字で書かれていた仏典の内容を、パラウン語のサブ・ゲ

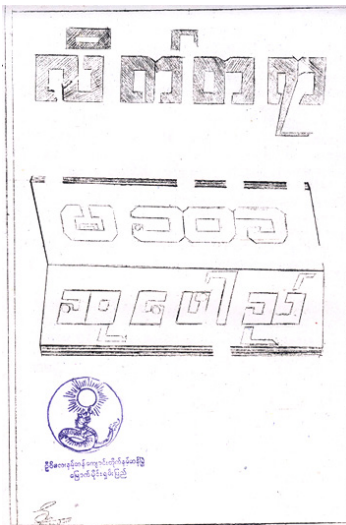


図3 ナーガテーナ師が  
創作したパラウン仏典

ループ(後述)の一つであるサームロンの言語に翻案しています。しかし、単なる翻訳ではなく、六音節を一節とする韻文(D: nge-kar-küp)形式であり、節の最初または最後で韻を踏むという形になっています。この形式は、ナーガテーナ師の独創ではなく、パラウンの伝統的なスタイルであり、そもそも独身男女が歌の掛け合いをする際、あるいは結婚式や新築式などの際の祝祭、葬式において死者を偲ぶ際などに、独特の節を付けて在家信徒が朗唱していたものです。ナーガテーナ師の独創は、そこに仏教に関する内容を含め、さらに独自の文字で筆記した点が挙げられます。

このナーガテーナ師の仏典は、ナムサン周辺地域において、在家のター・ジャレーという男性が、寺院境内の宿坊(ザロッ)で読み聞かせるわけです。ター・ジャレーが仏典を見ながら朗唱する際には、節を付けて歌うように誦えられます。一方、出家者が説法する際には、あらかじめ記憶しておき、節を付けません。これは、歌うような節回しが、歌舞音曲を禁じた戒に抵触するかだと説明されます。

#### エリート僧による「パラウン仏教」の強調

このようなパラウン語による実践は、私が調査した限りでは、特に若手のエリート僧らによって強調されています。マンダレーの寺院で、自らもパラウン仏典の創作に関わるP師(三九歳)は、以下のように言います。「今までのパラウン仏教は、パーイ・ヨン(P: Pai Yon ヨン派)とパー



イ・マーン (P: *Pai Man*、ブルマ派＝トウダンマ派) に分かれていたが、そうした対立をやめて、バーイ・タアーン (P: *Pai Tān*、パラウン派) としての仏教を確立していくことが大事だ」。そして、ナーガテーナ師の仏典創作に関しても、「ただバーリ語の経文を誦えているだけでは意味がない。意味まで理解するためには、パラウン語で説法する、または仏典を朗唱することが重要。そうした意味で、ナーガテーナ師が果たした貢献は大きい」と評価しています。

ここで、この若手エリート僧がどのような人たちなのか、説明しておきます。一九八〇年代頃まで、ヤンゴンやマンダレーへ教理学習に赴いたウー・ポーサンやナーガテーナといった出家者は非常に少数に限られていたそうです。その理由は、見習僧の多くはビルマ語が話せず、ビルマ語が話せなければ、ヤンゴンやマンダレーの都会に行っても非常に心細かったためです。

ところが、一九九〇年代に入ると、ヤンゴンやマンダレーに社会福祉寺院 (B: *parahia kyauṅ* 教育の困難な地域に居住する子どもたちが寄宿して、学校に通うための寺院) や、僧侶教育学校 (B: *hpondawgyi thin pinyayei kyauṅ* 見習僧や在家の子どもたちに、無償で世俗教育を受けさせる寺院) ができます。そこへ行って勉強することを目的とする見習僧出家者たちが急増してきます。

また、先ほども説明しましたように、一九八〇年代からビルマ語会話の可能な人が増加していくわけです。もはや見習僧たちもヤンゴン、マンダレーに出ることを恐れなくなりました。特に、親たちは、息子が袈裟を着れば都会で勉強することが可能になりますし、子どもたちの「目を

開かせたい」、つまり都会の進んだ社会について学ばせたいという考えから、見習僧が増加したと言われています。

彼らのなかには、一定期間を寺院で過ごした後、還俗する者もいますが、初級・中級・上級レベルの教理試験に合格した後、難関といわれる講師(B: Damasariya)試験に合格する僧侶もこの時代から増加していきます。

ここで「バラウン派」の主張を展開した僧侶の一人であるトゥーカ(Thuka)師の経歴を紹介しておきましょう。一九九〇年、二三歳のときに講師試験に合格し、ビルマ仏教の教義について一通り学習を終えた彼は、バラウン文字の創出に大きく貢献した先述のウー・ポーサンからバラウン仏教の根本にあるヨン派の実践を学ぶように勧められます。そこで、シャン州のタイ国境に面したターチャーレイの町にある寺院でヨン語を習得します。しかし、習得をするうちに、ヨン語はタイ系民族の言語であって、むしろ自民族であるバラウンの仏教を發展させることが重要だと考えるようになったと言います。つまり、他地域、他民族の仏教との接触を経験した「越境」経験者が、平地の仏教世界に巻き込まれつつも、バラウンという自らの民族の仏教を推進するようになったと言えるのです。

## 五 「パラウン派」の実態

では、その「パラウン派」の実態はどうなっているのでしょうか。この問題を考える際に、パラウンの場合は、サブ・グループ (P. Khmu) の存在が要になってきます。パラウンのサブ・グループは、メジャーなものだけで一三あるといわれています。さらに、小さなグループも入ると、その数はかぞえきれません。しかも、そのサブ・グループごとの言語差がかなり大きいのが特徴です。

この写真 (図4) は、ヤンゴンの寺院でおこなわれた寄進祭のときにパラウン女性の衣装を撮影したものです。この両端の二人がサムロン・グループです。そして、中央左がルーチン・グループです。



図4 サブ・グループによって異なるパラウン女性の衣服

それから、中央右がルー・マ・イ・グループです。グループごとの言語で話しても通じないため、もはや共通語はビルマ語になっています。

では、学生が「統一」したとされる文字の実態はどうなっているのでしょうか。シャン州各地で実際に調査をおこない、使用されている文字を調査しますと、「統一」されたはずのパラウン文字を使用しないグループが数多く存在することに気づきます。

仏典の創作者として有名なナーガテーナ師でさえ、タウンジー会議以降、基本字母にビルマ文字を採用しましたが、母音や末子音が示す記号に関しては、一九七二年以降も、学生の統一した表記法とは異なる文字で仏典を創作しています。つまり、パラウン文字講座で教育される「統一」文字とは異なる文字で、仏典は書かれているわけです。

一方、ルー・チン・グループでは、ヨン文字を借用したパラウン文字の仏典を広く使用するとともに、文字講座でもヨン文字借用版が使用されています。今までは、ナムサンの話が中心でしたが、パラウン全体で見れば、このルー・チン・グループは、パラウンのサブ・グループのうちの人口・分布地域とも最大規模を誇っています。さらに、独自の試験まで開催しているわけです。もちろん、ルー・チンの代表も、一九七二年の学生主催の文字統一会議には参加しているのですが、その結果を地元で説明しませんでした。そのため、ヨン文字を借用した独自の文字が存続していったのではないかといわれています。この事例が示すように、民族全体としての一体感より、むしろサブ・グループごとのまとまりのほうが強く意識されていることが分かります。

ここでバラウンのサブ・グループについて簡単に説明しますと、近年でこそ、グループ間、民族間の通婚も認められるようになっていますが、以前はグループ内でしか結婚は認められず、今でもそれを維持しているグループもあります。入安居、中安居、出安居の一年に三回、グループ全体の母村を訪れ、僧侶や村の老人、親戚に対して礼拝します。また、出安居の後には、グループの住職のなかで法臘が最大の僧侶をグループ全体で訪れ、カティナ衣(特別な袈裟)を奉獻します。他教派の寺院の住職になれないのみならず、教派が同一であっても、サブ・グループが異なれば、その村の住職にはなれません。マンダレーやヤンゴンにあるパラウン寺院でも、サブ・グループごとにお寺が建てられています。

先ほども述べましたように、同じパラウン語でも、サブ・グループ間には会話が成立しないほどの相違が存在しています。そのため、統一されたパラウン文字を使用するグループもありますが、中国国境付近のムン・マーウ盆地に多いルー・マーイ・グループ(図5)やナムサン郡、チャウマー郡に分布するルー・カーウ・グループでは、出家者や在家の知識



図5 ルー・マーイ語で書かれた仏典

人が、サブ・グループの言語によって独自の仏典を作成しています。

しかしさらに言うなら、サブ・グループ内の村落における仏教実践も、完全に一致しているわけではありません。先ほど挙げたルーカウ・グループのうち、ナムサン郡に隣接するチャウメー郡フークエツ村では、周囲にシャン族の村も点在しております。五〇七戸の住民のうち一五戸はシャン族の環境ということもあり、村人のほぼ全員がシャン語での会話が可能です。フークエツ村のター・ジャレーは、葬式や雨安居期間中の布薩日には、パラウン文字ではなく、シャン文字の仏典をシャン語で朗唱します。これは若い世代の多くが、シャン語を理解できないナムサンとは対照的で、言語の環境によっても使用言語は差異が生じるわけです。

このような事例から分かるのは、「パラウン派」の以下のような内実です。すなわち、パラウンの民族エリートたちは、民族意識に根ざした「ヨン派・ビルマ派からパラウン派へ」という表現を用います。確かに、仏教儀礼におけるパラウン語の使用は増加する傾向が見られます。一方で、現実には「パラウン派」は決して一枚岩ではなく、パラウン内部のサブ・グループごと、さらには村落ごとに独自の実践形態が見られます。

こうした現状について、エリート僧も認識はしています。彼ら自身、パラウン語による仏教実践の普及に努力する一方で、パラウン語は多様性が大きく、実践の標準化を実現するのは困難だとも感じています。そこで現状では、自民族の言語をまず使用することが大切だと考えているのです。

## 六 「パラウン仏教」の創出とその実態

ではここで、最初に挙げた問いに答えておきましょう。

まず、どのようなプロセスで「パラウン派」の実践が構築されたのか、という問題です。ビルマ中央部や外国の世界と接触した経験を持つウー・ポーサンは、パラウン文字を創出し、マンダレー大学の学生たちがパラウン文字を統一しました。仏教教理を学ぶため、マンダレーまで越境したナーガテーナ師は、パラウン語の仏典を創作し、その後、エリート僧たちが「パラウン派」の仏教を推進しています。すなわち、平地へと「越境」した人々が大きな役割を果たし、仏教実践におけるパラウン語の使用は増加する傾向にあります。また、平地のパラウン族、茶摘み労働者の流入や学校教育の浸透により、シャン語からビルマ語へとリンガ・フランカが変化しました。それらの理由によって、若い世代の在家信徒がシャン語を理解できなくなったことも、このような変化が受容されるようになった要因の一つです。

次に、山地における「パラウン派」の実践は、リーチの議論のように、平地の仏教の模倣に過ぎないのか、という問題です。確かに平地民の実践を模倣した側面も見られるのですが、以下の二点において、前近代の受容形態とは異なっているのではないかと考えます。まず、前近代においては、益地のタイ系言語をそのまま使用していました。それに対して、特に一九七〇年以降、民族独自の言語による実践が目指されています。次に、言語をそのまま民族語に翻訳したことに

とどまらず、民族独自の節回しを流用していることです。特に移動を重ねるエリート僧らは、平地の仏教を吸収しつつも、平地の実践への単なる同化には向かわず、パラウン独自の実践を主体的に築いていると考えられます。

最後に、「パラウン派」仏教のシヤン州各地における実態はどうなっているのかという問題です。私の調査により、村落レベルの仏教実践に目を向ければ、言語使用のみに焦点を当てても、先ほど言いましたようにサブ・グループごと、さらに同グループ内でも地域ごとにかんがりの多様性が見られることがわかりましたし、エリート僧自身もそれを認識しています。

このパラウンの事例は、ミャンマーでは決して特殊ではありません。他の少数民族を対象に調査を行っても、エリート僧らによる「民族仏教」の語りをしばしば耳にします。これはパラウンと同様、特に近代以降に顕著となった現象ではないかと推測されます。しかし実際に少数民族村落で調査を行うと、研究者の立場からも、ある民族に均質な仏教が存在するとは言えませんし、少数民族の人々全体にそのような意識が共有されている訳でもありません。上座仏教徒社会の各地域の上座仏教は、比較的均質なパーリ仏典を保持し、儀礼にも共通する点はあるのですが、仏典に用いられる言語以外の実践に注目すれば、さらなる多様性が見られます。今回は時間の都合で触れられませんが、少数民族の多様な実践に注目することは、主に平地の主要民族の事例に基づいて表象されてきた上座仏教のあり方を、相対化することにもつながるのではないかと考えています。



註

- 1 本発表の内容は、以下の論文と重複する部分が多い。詳しくは下記を参照されたい。  
小島敬裕・2015。「山地民パラウンの越境と仏教実践の独自性―ミャンマー・シャン州ナムサン周辺地域の事例から」『東南アジア研究』五三(一)、1―35頁。
- 2 ローマ字の前にB:とあればビルマ語、P:とあればパラウン語、S:とあればシャン語であることを示す。
- 3 Leach, Edmund R. 1960. "The Frontiers of "Burma." *Comparative Studies in Society and History*. 3 (1), pp. 49 - 68.
- 4 Milne, Leslie. 2004 (1924). *The Home of an Eastern Clan: A Study of the Palangs of the Shan States*. Bangkok: White Lotus.
- 5 Paw San. 1997. *Saygyi U Paw San yi Ahnpanti* [ウー・ポーサン先生の自伝]. Yangon: Momin Sapei.
- 6 Kojima Takahiro; and Badenoch, Nathan. 2013. From Tea to Temples and Texts: Transformation of the Interfaces of Upland-Lowland Interaction on the China-Myanmar Border. *Southeast Asian Studies*. 2 (1), pp. 95 - 131.
- 7 Min Naing. 1962. *Meido Palang* [母国のパ°ラウン]. Yangon: Pyidaungzu Yinkyeihmu Wungyi Htana.
- 8 Thu Hka, Tsau. 2009. *Ta'an Sapei Hkay' hnin Ta'an Sabyu Pokgonyado yi Ahnpanti* [タアーン文字の旅ヒタアーン文字考案者たちの自伝].

- 9 Thu Za Ta, Ashin. 2012. *Taungpangnei (Namsan) Deitna hma Ta'ang (Palang) Taingyindado yi Bathayei hnin Yinkyethmu ko Leilachin* [ナムサン地域のタフーン(パラウン)族の宗教と文化に関する研究]. (Naingngandaw Pariyarti Thathana Tethatho, Mandalei マンダレー国家仏教大学) 参十編文。
- 10 E. R. リーチ 1995『高地ビルマの政治体系』関本照夫(訳)『東京: 弘文堂』(原著 Leach, Edmund R. 1954. *Political Systems of Highland Burma*. London: G. Bell & Sons Ltd.)